

教室で学ぶ英文学

一人文学演習I、IIにおける試みと今後の課題

香山はるの

2013年度、2014年度の人文学演習ではイギリスの女性作家をテーマに取り上げた。具体的には、2013年度の人文学演習Iにおいてはブロンテ姉妹に焦点を当て、春学期はシャーロット・ブロンテの『ジェーン・エア』(Jane Eyre)、秋学期にはシャーロットの妹のエミリーが書いた『嵐が丘』(Wuthering Heights)を読み、翌年の人文学演習IIにおいては、ブロンテ姉妹より少し前の時代に活躍したジェーン・オースティンの『高慢と偏見』(Pride and Prejudice)を読んだ。文学に関心を持つ学生が最近目に見えて少なくなっていること、学生の英語の読解力も全般に低下気味であること、以前は多くの子供が当然のように読んだ少年少女向けの「世界名作全集」の類を今日の学生たちは読んでいないことが多いこと等々、英文学関連の授業を担当する者としては頭を悩ます問題が多々ある。どうしたら学生たちが本を読むようになるか、そのきっかけとなるような、学生の興味を喚起する魅力的な授業はどのようなものか等色々考えることがあった。2008年に出版された『東大の教室で「赤毛のアン」を読む』(東京大学出版会)など優れた授業実践の本も参考にしながら、自分の演習で可能なことを考えてみたが、まずは、学生が自由に意見を発表したり、議論する機会を多くつくることを目標とし、特に演習Iでは「グループ・ワーク」或いは「グループ・ディスカッション」を充実させることから始めてみようと考えた。以下、その内容を記し、効果的であったこと、なかったこと、問題点等を考察し、今後の課題としたいと思う。

最初に演習I、IIで使っているテキストについて触れておきたい。ここ数年、テキストは、ペンギンやオックスフォード・ユニバーシティ・プレスから出ている“Penguin Readers”や“Oxford Bookworms Library”等、原作を簡単な英語で短縮した50ページから100ページ位のテキストを使っている。英語のテキストにこだわる理由としては、「翻訳で読む英文学」のような形に完全にはしなくなかったこと、また、学生にはたとえ原書通りではなくても、辞書を引き英語に触れる時間を多く持ってほしいという気持ちがあったからであるが、一方では難点もあり、テキストの使い方には工夫が必要である。まず、平易な英語とはいえ、読解に時間がかかること。特に、真面目な学生はこちらで指示しなくても予習して日本語訳を全部(!)ノートに書いてくることがあるが、あまり丁寧にやっていると授業が「英文和訳」で終わってしまうので、重要な箇所は学生に担当させ、後は教員が訳して解説する、或いは、あまり重要でない箇所については翻訳を利用する等、状況に応じて柔軟な対応が必要である。また、短縮版テキストの使用に伴う危険としては、省略されて

いるところが多く話が急展開する傾向があるため、小説を理解するのに欠かせない重要な場面が抜け落ちていたり、時には話が原書とは若干違うものになっていることすらあるということである。これに対する対策として、教員が省かれている箇所について解説をする、学生には翻訳も読んでおくように指示する等これまでも配慮してきたが、今後も使うテキストによっては様々な注意が必要である。

グループ・ディスカッションについては、最近おとなしい学生が多いため、ゼミ生の親睦を深めるという目的に加え、より話しやすい小さなグループの中で活発な議論が生まれることを期待して導入した。また、問題を色々な角度から考察できるという効果も期待した。ある問いに対する回答を想定し、小説からその答えを裏付ける箇所を探した上で自分の主張を他の人に理解してもらい、そして、その際に関心を持った時代背景なども調べる、といった作業をグループで行うことによって、文学研究の基礎を身につけてほしいと考えた。

演習Iでは英語のテキストを全員で読み進めながら、こうしたグループ・ワークを随時取り入れた。春学期第一回目のグループ・ワークは、シャーロット・ブロンテの生涯と作品、彼女が生きた時代について調べて発表するというものであった。具体的には、12人のゼミ生を4つのグループに分け、シャーロット・ブロンテの「幼少期から作家になるまで」、「作家生活、晩年」、「主な作品について（あらすじや今日の評価など）」、「ブロンテが生きた時代のイギリス社会（特に女性に関して）」という内容をそれぞれ担当するグループが調べて発表を行った。おとなしかった学生たちも互いに話し合う機会が増え、ゼミにも活気が少しずつ生まれてきたように思われた。発表の形式は各々のグループに任せたが、グループのメンバーは全員、必ず一言は話すということがルールであった。ディスカッション、そしてそれをまとめた発表は、数回の授業にわたって行われたが、それによって、小説の主人公、ジェーン・エアとブロンテ自身の類似点（たとえば地味な容姿、家庭教師の経歴等）が浮かび上がってきた。また、当時の社会における女性の立場も学生に強い印象を与えたようである。19世紀のイギリスでは「女性作家」は三流と見なされる傾向にあったため、ブロンテ姉妹が男性と思われるようなペンネームを使って出版社に作品を送ったこと、あまり裕福ではない中流階級の女性が社会的な体面を最低限保ちながら、生計を立てるために就けた職業は「(住み込みの) 家庭教師」や「作家」位しかなかったこと等、詳しく調べて発表したグループもあった。

第二回目のグループ・ワークは、『ジェーン・エア』を理解する上で重要なポイントとなる問いを教員が提示し、それについて各々のグループが考えて答えを出し、小説から「論拠」を示してそれを説明するという内容で、4回の授業を使ってディスカッションと発表が行われた。たとえば、「ジェーンにとって職業とは何か」、「彼女はなぜ愛するロチェスターを振り切って行く当てがないにも拘わらず屋敷を飛び出したのか」、「ジェーンにプロポーズする従兄のセント・ジョンの性格はどのように描かれているか」、「作者はなぜ火事でロチェスターに大きな傷を負わせたのか」、「西インド諸島のバーサ・メイソンの役割は何か、作者はバーサをどのように扱っ

ているか」、「ジェーンは彼女が主張してきた自立を最後に手に入れたと言えるか」、「『ジェーン・エア』はシンデレラ・ストーリーとして読めるか」、或いは「フェミニズム小説として読めるか」、「ジェーンがセント・ジョンのプロポーズを承諾しようとしたとき、突然ロチェスターが自分を呼ぶ声が聞こえてきて思いとどまる場面があるが、作者はなぜこのような超自然的ともいえる場面を作ったのか」等々である。こういった細かい内容を検討するには、途中省略のない原作を読むことが必要なので、翻訳を使った。ディスカッションは、グループによって進み具合や雰囲気異なるが、全般として学生は予想以上に楽しそうに取り組んでいた。特に「この小説はシンデレラ・ストーリーとして読めるか」という問いに対しては、「そもそもシンデレラ・ストーリーとは何か」を考えるとところから始まり、グループ内でも様々な意見が出て活発なディスカッションが行われた。こうしたグループ・ワークを通して、私が学生に特に気がついてほしいと考えていた点は次の3つである。①「ただ一つの答えがあるということではない。基本的に筋が通っていれば、どのような答えを出してもよい。」②「～ではないかと感じた、という感覚はとても重要だが、感想を発表するのではなくて、小説から例証となる箇所を示して主張することが重要である。」③「自分とは違う意見も想定して、どう反論できるか考えておく。」また、教員として留意すべき点もある。それは①「グループ内で意見が分かれた場合には、無理に一つの答えにまとめさせず、異なる幾つかの意見をそのまま発表させる。」②「教員が巡回して、議論が進んでいないグループには、発言の少ない学生を中心に、考えるヒントを与える。」③「それぞれのグループが発表した内容に対して、教員がさらに質問や、時には反論をすることで、学生が問題をより深く考えるように促す」こと等である。その他、反省点としては、細かいことではあるが、グループを時々組み直して色々なメンバーと新鮮な話し合いができるようにするということである。そうすることにより「常に議論が活発なグループ」と「そうではないグループ」に分かれてしまうことも防げるのではないかと思う。私が見ていたところ、学生たちは授業内で話し合う他、互いに連絡を取り合い昼休み等に打ち合わせをしていたようである。また、グループで発表する際は、そのグループのメンバー全員が何か一言は話さなければならないことにしていたので、責任を感じたためか、授業の欠席者が少なくなるという効果もあった。

演習Iの秋学期には、エミリー・ブロンテの『嵐が丘』を取り上げた。春学期の『ジェーン・エア』と同様、英語の短縮版テキストを読み進めながら、適宜グループ・ワークを取り入れた。テキストで省かれているところが多かったので、特に後半の章については翻訳を使ってグループごとに分担を決め、それぞれの章について簡単なあらすじを述べ、ポイントとなる場面や登場人物について説明し、疑問点等を出し合うという内容であった。これが秋学期最初のグループ・ワークで、3回の授業を使ってディスカッションと発表が行われたが、残念ながらあまり成功しなかったと反省している。この作品はもともと各章の長さが大きく異なるため、章による分担自体難しく、また同じグループの学生の間でも作品を読む速度にバラツキ

があるため、結果としてこれはグループで行うよりも一人一人が決められた章を担当して内容をまとめる形式にした方が、時間的な観点から考えても効率的であったように思う。

秋学期第二回目のグループ・ワークは、『ジェーン・エア』の第二回目のグループ・ワークと同様、小説『嵐が丘』の重要なポイントについて、教員が提示する問いに対する答えを探り発表するというものであった。たとえば、『ジェーン・エア』は主人公が自分の人生を「私は…」という一人称で振り返って語る形式である。これに対して『嵐が丘』は家政婦のネリーが旅人ロックウッドに自分が目にしてきたアーンショー家とリントン家の物語を語るという形になっているが、作者エミリー・ブロンテはこのような語り的手法をなぜ選んだのか、「キャサリンが幸せになれなかったのはなぜか。なぜ彼女は愛するヒースクリフを捨てたのか」、「ヒースクリフの復讐は成功したと言えるのか。言えるとしたらそれはなぜか、言えないとしたらなぜか」、「キャサリンやイザベラのキャラクターの描かれ方から、当時の社会における女性の立場についてどのようなことが考えられるか」、「キャサリンの娘であるキャシーとヘアトンなど、いわゆる第二世代のキャラクターはこの小説の中でどのような役割を果たしているのか」、「ヒースクリフとキャサリンは死後の世界で結ばれたという解釈には賛成するか。イエス、ノー、どちらの答えであっても理由を説明すること」などである。全般として、学生にとって『嵐が丘』は『ジェーン・エア』よりも難しかったようである。特に印象的であったのは、殆どの学生が「キャサリンとヒースクリフは死後結ばれた」という解釈をしたが、それは希望を込めた感想に近く、根拠の説明ができないというケースが多かった。私自身は、今後は、たとえば結末について異なる解釈をしている幾つかの映像を見せて学生に考えさせる等、質問の仕方自体を工夫する余地があると反省を交え考えている。

既に述べた通り、翌年の演習Ⅱでは、イギリス女性作家の元祖ともいわれるジェーン・オースティンの『高慢と偏見』を読み進めた。学生が就職活動でいよいよ忙しくなってきたこともあり、グループ・ワークは現実的に難しくなってきたため、各学生の意見を聞いた上で、クラスでディスカッションするという形を取るようになった。ディスカッションと言っても常に大がかりな準備を要するものではない。たとえば、この小説の有名な書き出し、「独りもので、金があるといえば、あとはきつと細君をほしがっているにちがいない、というのが、世間一般のいわば公認真理といってもよい」(『自負と偏見』新潮文庫 中野好夫訳)という一文はどういう意味か、「世間一般のいわば公認真理」とは実際どういうことだと思うか、という問いを投げかけ、各自に考えを話してもらったり、ある重要なキャラクターを作者オースティンがどう描いているか等、自由に意見を述べてもらうこともあった。ブロンテ姉妹の作品を読んだ後なので、オースティンとブロンテ姉妹の比較も可能であり、たとえば、学生に『ジェーン・エア』、『嵐が丘』、『高慢と偏見』の中でどの作品が一番好きで、それはなぜか、というような素朴な質問を試みることもあった。感情移入しやすいという理由で一人称で書かれた『ジェーン・エア』を挙

げる学生もいた。「情熱的」なエミリー・ブロンテの『嵐が丘』が好きであるという意見もあった。また、深刻なブロンテ姉妹の作品の後でユーモアや機智に富んだオースティンの喜劇を読んだことは新鮮な経験であり、ハッピー・エンドを予想しながら楽しんで読んだという者もあった。ここで私は、シャーロット・ブロンテが先輩作家オースティンを「情感がない」と批判したエピソードを紹介したが、こうした作家の気質の違いやそれぞれの作家が生きた時代の違いに興味を示した学生もいた。

この演習Ⅱでは『高慢と偏見』を読み進めていく一方で、卒業論文に関しても数回中間発表を行った。たとえば、春学期にはまず「卒論に選んだテーマ」や「取り上げる作品」について発表し、次に卒論の大まかな内容（「アウトライン」）の発表を行った。また、秋学期には「序論」を皆の前で読み上げて私がコメントを加えるという形式の発表を取り入れたが、学生によって卒論の進み具合が異なるため、基本的には各々の学生が自らの進度に合わせた発表をすればよいという方向で、柔軟に対応した。前年の演習Ⅰで行ったグループ・ディスカッションの内容を発展させたテーマで卒論を書くことと決めた学生もいた。全般的に、学生のテーマの選び方、問いの立て方、答え方は一年経って若干向上したように思われた。「自分の意見を提示し、小説からその論拠となるところを挙げて説明する」というパターンにも慣れてきたようであったが、自分の主張を論理的に説明をするという点は、提出された卒論を読んでも、全体的にやや弱かったことが残念であり、指導面における今後の課題であると痛感した。テーマに関していえば、12人の学生のうち、4名がオースティンの小説、4名がシャーロット・ブロンテかエミリー・ブロンテの小説、或いはシャーロット・ブロンテとオースティンの小説の比較を選んだ。残りの4名については、授業で取り上げなかった同時代の他の作家、エリザベス・ギヤスケルやチャールズ・ディケンズなどの作品にチャレンジした。学生は卒論に対して真面目に取り組んでいたが、全体的にやや進度は遅く、提出日が近づいてくるとこちらの方がハラハラした。この経験を踏まえて、今後は、特に授業では読まなかった作品に取り組む学生に対してどのようなサポートが必要か、より配慮して指導する必要があると考えている。ちなみに私のゼミの卒論の評価項目は次の6つである。①テーマを十分に追求し、明確な結論を示しているか。②論理的な説明、適切で説得力のある例証ができていないか。③論文の形式面（章の構成、引用の仕方、誤字の有無、文章の読みやすさ等）における問題がないか。④参考文献を読んで勉強した成果が表れているか。⑤主張に独創性があるか。⑥努力して内容を深めた跡が認められるか（到達度）。③についてはたとえば、章の構成や文章の読みやすさなどチェックするポイントが多岐に亘るため、さらに項目を分けて整理し直してもよいかもしれない。演習Ⅱの授業では春学期に、この評価項目を学生にあらかじめ配布して、卒論執筆に関する重要なポイントとして注意を促している。実際に卒論を返却する際にはこの評価シートにA～Cの評価をそれぞれ書き入れ、全般的なコメントも加えた用紙を学生に渡す。その時に行う面談は、この評価シートを見ながら私が各々

の卒論について講評をした後、学生が私の質問に対して答えたり、自分の考えを説明するという形式で行われる。上に挙げた①～⑥の評価項目に関しては、今年は全般として①、④、⑥は比較的评价が高く、⑤についても前年度に比べてユニークなテーマに取り組んだケースが多かったことから平均して評価は高かったが、他方、既に述べたように②については「論理的な説明」という点で評価がやや低かった。今後の指導でもこの点を伸ばせるよう工夫していきたい。

以上述べたように、まだ試行錯誤の段階であり、修正すべき点も少なくないが、全般として発表、特に小説の重要なテーマを探るグループ・ディスカッションは学生も楽しみ、卒論においても、テーマの立て方や展開の仕方において効果が見られたので、継続して演習に取り入れていきたいと考えている。また、私が示す問いに学生が答えるだけではなく、学生が自ら抱えている疑問点等を提示し、皆で考えるという方法も試みとして今後導入したいと感じている。ちなみに、数年前から私のゼミでは、就職活動や卒論を終えた4年生（演習II）の有志に、後輩（演習I）に向けて自分の経験を話してもらう機会を設けている。これは直接には「先輩から話を聞きたい」という3年生の要望があったことから始まった。先日、「先輩は卒論を書くのに、どのくらい本を読んだんですか」という3年生からの質問に「20冊くらいでしょうか」と堂々と答えて、「えー！（そんなに沢山？）」と下級生をギョッとさせている4年生の横顔を見て、この一年で成長したのかなとふと感じた。就職活動の方はなかなか力になれないが、学生が大学生生活の良き思い出となるような卒論を書けるよう、非力ながら今後も演習における内容や指導を工夫していきたい。また、学生の「文学離れ」が続く難しい状況であるが、学生が心を揺さぶられる一冊の本と出会うきっかけとなるような、魅力ある授業ができるように努めたい。

参考文献

山本史郎『東大の教室で「赤毛のアン」を読むー英文学を遊ぶ9章』東京大学出版会、2008年。